

Chicago Grammatical Texts

に於ける Ventive について

吉 川 守

シュメール語の言語学的な研究態度として、従来つぎの二つの方法がとられてきた。その一つは、シュメール語の実資料、とくに *Altsumerisch* から *Neusumerisch* にいたる、いわば古典期のシュメール語資料のみの分析に依って、文法組織を再構する方法であるが、この立場には、視野に限界があつて、主観的解釈に陥りやすい欠点があつた。第二の方法は、バビロニア人の文法テキストを攻究対象として、その分析と解釈に依拠する態度であるが、この方法にはその示唆性に於いて利点が認められても、バビロニア人のシュメール語に対する理解そのものに問題が内在していた。

従つて、現段階では、バビロニア人の所説を、シュメール語の実資料に於いて吟味検討し、不明部分を明らかにすることが得策と思われるので、本稿では、*Chicago Grammatical Texts*¹⁾ に見られる顕著な分類基準の一つである *Ventive* を採り上げて、先ず *Jacobsen* 教授の分析とその解釈に関する問題点を指摘して見ることにする。

アッカド語に認められる Verbal suffix *-am/-nim*²⁾ の *Ventive* としての性格は、*B. Landsberger* 教授によって闡明され、*W. von Soden*, *Jussi Aro* の各教授もこれに従っているし、*I. J. Gelb*, *L. A. Lipin* 氏等も *Allative* という名称でこれを承けていることは周知の事実である³⁾。

Jacobsen は文法テキストに於いて著しいこの *Ventive* に着目し、シュメール語の Verbal prefix を、アッカド語の *Ventive* で訳されているグループと、訳されていないグループとに整理し、検討を加えている。その対立を示すと次のようになる：

1) *Ventive* で訳されているシュメール語の Verbal prefix :

im-ma-, *àm-ma-*, *àm-mi-*, *i-im-*, *àm-*, *im-mu-*, *àm-mu-*, *ma-* (*ma-*, *ma-ra-*), *mu-* (但し、例外が多い。後説)。

2) *Ventive* で訳されていないシュメール語の Verbal prefix :

ba-, bí-, i- (i-, in-).

このような分別整理によって、一見して気付く各グループの徴条は、1) 群に於ける共通の要素 /m/ と、2) 群に於ける /b/ 要素との対立である。この特徴的要素の析出とアッカド語の Ventive の機能との校量によって、Jacobsen 教授は The speaker's „ken“ / „non-ken“ theory を MSL, IV の Introduction の各処に於いて展開した⁴⁾。/m/ 要素が表わす The speaker's ken は ‘speaker にとって、直接の興味及び関心のある時間及び空間の area を示し、一般には „here / now“ を意味する’ と説明され、/b/ 要素の The speaker's non-ken に就いては、‘話している瞬間に彼にとって殆んど或いは全く興味のない、いわば Vague limbo を意味する’ と説かれている。かくの如き分析が、大体に於いて、バビロニア人の Ventive / Non-ventive 対立の意図に照応していることは、Neobabylonian Grammatical Texts に於ける次の個所を吟味して見れば理解出来る：

NBGT, Tablet I.⁵⁾

85) ub	<i>a-na-ku šu-ús-ḥur-tum ma-li-tú MÚRU-tú</i>
86) ub	<i>at-ta šu-ús-ḥur-tum <ma-li-tú> MÚRU-TA</i>
87) ub	<i>šu-u šu-ús-ḥur-ti ma-li-tú AN-TA MÚRU-TA</i>
88) íb	
89) ta	<i>šu-ús-ḥur-tú riq-tim AN-TA MÚRU-TA</i>
90) um	<i>ri-a-tum AN-TA MÚRU-TA</i>
91) àm	
92) im	
93) me	
94) un-ga-	
95) an-ga-	
96) in-ga-	
97) en-ga-	
98) [ma-]ra-	
99) ma-da-	
100) 「ma」-ta-	

- | | | |
|----------------|--|---------|
| 101) ma-da-ta- | | |
| 102) gá-e | | a-na-ku |

NBGT, Tablet II (=Bertin tablet)⁶⁾

- | | | |
|--------|---|---|
| 86) un | { | š <u>u</u> -ú šá e-li-ti [(x x)] |
| 87) an | | u š <u>u</u> -ús- <u>hur</u> -ti 「e-li-ti」 |
| 88) in | | AN-TN ù [(x(x x))] |
| 89) en | | |
| 90) ab | | |
| 91) ub | | š <u>u</u> -ú šá š <u>u</u> -ús- <u>hur</u> -ti [(x x (x))] |
| 92) ab | | |
| 93) íb | | |
| 94) eb | | a-na-ku " [(x x)] |
| 95) un | | a-na-ku ù-a-ti šá [ma-li-ti] |
| 96) an | | |
| 97) in | | |
| 98) en | | |

上表に見られる文法術語 *šu-ús-hur-tum* 及び *ri-a-tum* を, Jacobsen はそれぞれ, 《Direction away from the speaker》, 《Direction to speaker》と訳出しているが (MSL, IV. p. 190 & 189), 意味の上からも, *riatum* は Ventive に相当すると考えられるし, *saháru* 《sich wenden》に由来する *šushurtum* は Non-ventive に一致すると考えられる。従って, NBGT, I 94) -97) の in-ga- とその展開に於ける諸形及び Bertin tablet の /n/ を含む諸形 (86-89)を除けば, Chicago GT の Jacobsen の分析とその解釈は大体に於いて要を得ていると言える。

このような論拠に依って, Jacobsen はさらに氏の理論を発展させるのであるが, それに論及するに先立ち, まず, バビロニア人の見解が, シュメール語の正しい理解の上に立って行われているかどうか, また Jacobsen の理論が正当と認められるかどうかに関いて検討を加えて見る。

I

I — (i) 先ず第一の問題点は、Jacobsen がシカゴ文法テキストに見える im-ma- 形 (/àm-ma-) 及び文法テキストには採録されていないけれども、これと近い関係に立つと考えられる im-mi- 形 (/àm-mi-) を /m/ 要素と看做した点にある。叙上の如く、バビロニア人も同じように理解していたと思料されるのであるが、これらの Prefix 形は、現代のわれわれの分析では⁷⁾、その原形として *i-ba- (> e-ma- > i-ma- > im-ma-) 及び *i-bí- (> i-mi- > im-mi-) 形が措定され、im-ma-, àm-ma-, im-mi-, àm-mi- の諸形は、かえって /b/ 要素と看做されなければならない。

*i-ba- 及び *i-bí- を古形に措定する主要な理由は、実資料に於ける次の如き Parallelism の存在である：

- 1) Gudea, Cyl. A. Col. IV⁸⁾
- 22) utu ki-šár-ra ma-ta-è
- 23) mí-aš-àm a-ba me-a-nu a-ba me-a-ni
- 24) sag-gá-è ki-kinda mu-ak
- 25) gi-dub-ba-kù-NE-a šu im-mi-du_s
- 26) dub-mul-dùg-ga im-mi-gál
- 27) ad im-da_s-gi₄-gi₄

《太陽が、地平線から私の方へ登ってきました。(その時) 一人の女性がいました。彼女は一体誰でなく、一体誰なのでしょう。……。彼女は、輝く筆を手に持っていました。良き星 (を描いた) 泥章がそこにありました。(そして、) 助言してくれました。》

cp. ibid. Col. V

- 19) utu ki-šár-ra ma-ra-ta-è-a
- 20) ^dNin-giš-zid-da utu-gim ki-ša-ra ma-ra-da-ra-ta-è
- 21) ki-sikil sag-gá-è ki-kinda mu-ak
- 22) gi-dub-ba-kù-NE šu bí-du_s-a
- 23) dub-mul-dùg-ga bí-gál-la-a
- 24) ad im-da-gi₄-a
- 25) egi-mu ^dNidaba ga-nam-me-àm

《地平線から、お前の方へ登った太陽は、ニンギシュジダ神が太陽のように地平線か

ら、お前の方へ登ったのだ。……。輝く筆を手に持ち、良き星の泥章がそこにあり、助言を与えた処女は、実に私の姉妹ニダバ女神にてあるぞや。))

2) Urukagina, Cone B & C, Col. VII 29)~VIII 6)

VII, 29) u₄ ^dNin-gír-su 30) ur-sag-^dEn-líl-lá-ke₄

VIII, 1) Uru-ka-gì-na-ra 2) nam-lugal- 3) Lagaš^{ki} 4) e-na-sum-ma-a

5) šà-lú-36000-ta 6) šu-ni e-ma-ta díb-ba-a

(「—。36,000人の中から、彼の手を取った時に、」)

cp. Entemena, Frag. of a Stalagmite Vase, Col. I

1) ^[d.]En-k[i] 2) [šà-l]ú-3600-ta 3) [š^u-n]i ba-ta-díb-ba-a 4) [……]
-maḥ

(「3,600人の中から、彼の手を取った時に、」)

cp. Gudea, Stat. B, Col. III

6) u₄ ^dNin-gír-su-ke₄ ~ 8) Gù-dé-a 9) sipa-zi-šè kalam-ma ba-ni-
pàd-da 10) šà-lú-216,000-ta 11) šu-ni ba ta-an-díb-ba-a

(「216,000人の中から彼の手を取った時に、」)

3) 経済文書に於ける“(木を)切り倒した”という表現の次の如き Parallelism.

na bí-ri DP. 420, 421, 429, 431, 432, 433, 436, 450, 451, 453, etc.

na bé-ri DP. 429.

/na ì-mi-ri DP. 418, 427, 430, 444; Fö. 157, etc.

na e-me-ri DP. 428.

このような用例 (及び Gudea, Stat. F, Col. III 12~Col. IV 13 など) から、e-ma- (im-ma- の古形) と ba-, ì-mi- (im-mi の古形) と bí- との間に、密接な関係の存することが容易に理解されよう。しかも、後述する如く、im-ma- 及び im-mi- に含まれる -ma- と -mi- は、他の ma- 及び mi- とは全く別個のMorphemeに属するため、形態面のみでも、先述の如き推移を措定するのが妥当かと思われる。

I — (ii) 第二の疑問は、Verbal prefix mu- が、アッカド語の Ventive 及び Non-ventive で、訳し分けられている点に検討を加えることを避けて、mu- を /m/ 要素に算入している点である。

次に、Ventive で訳されていない mu- の例を挙示して見る：

OBGT, VI

124) mu-un-gar	<i>iš-ku-un</i>
125) mu-gar	(<i>blank</i>)
126) mu-gar	(<i>blank</i>)
127) mu-ni-in-gar	<i>ú-ša-aš-ki-in</i>
130) mu-un-da-gar	<i>iš-ku-un-šu</i>
135) mu-di-ni-íb-gar	<i>ú-ša-aš-ki-iš-š(u)</i>
136) mu-na-an-gar	<i>iš-ku-un-šum</i>
139) mu-na-ni-in-gar	<i>ú-ša-aš-ki-iš-šum</i>

OBGT, X

5) gub-mu-na-「ab」	<i>i-zi-iz-zum</i>
6) gub-mu-na-ni-íb	<i>šu-zi-iz-zum</i>
34) mu-un-gub	「 <i>iz</i> 」- <i>zi-iz</i>
35) mu-ni-in-gub	<i>uš-zi-iz</i>
36) mu-un-da-gub	<i>iz-zi-iz-zu</i>
37) mu-di-ni-íb-gub	<i>uš-zi-iz-zu</i>
38) mu-na-an-gub	<i>iz-zi-iz-zum</i>
39) mu-na-ni-in-gub	<i>uš-zi-iz-zum</i>

この他、OBGT, VIII, 40, 86; IX, 132, 133, 134, 135, 136 に於いても mu- は Ventive で訳されていない。この mu- の取扱いに於ける微妙さは、OBGT, X, 6/12 の対比によっても窺うことが出来る。

6) gub-mu-na-ni-íb	<i>šu-zi-iz-zum</i>
12) gub-mu-na-ni-íb	<i>šu-zi-iz-za-aš-šum</i>

(もちろん、*šu-zi-iz-zum* は **šu-zi-iz-šum* の、*šu-zi-iz-za-aš-šum* は **šu-zi-iz-za-am-šum* の同化形で、12) は Ventive として訳されている。) Prefix mu- の、このように著しい訳し分けの理由を、本稿では叙べ得ないけれども⁹⁾、上に例示した如き Non-ventive としての mu- を /m/ 要素の単なる例外として無視し得ないことは明らかで、Jacobsen の理論に疑義を呈する一つの理由である。

I — (iii) 第三の問題点は、Jacobsen の所論では、Verbal prefix の中で、mu-

と共に主要な位置を占める i- が /m/ : /b/ 対照の枠からはずされていることで、この点に大きな疑問が残る。シカゴ文法テキストは i- (及び in-) を Non-ventive と看做し、先出の NBGT, Tablet II の作成者も in- とその展開の諸形を Non-ventive として扱っているが、バビロニア人自身、mu-/ i- の機能の差を理解し得なかったか、少なくともその理解をアッカド語で文法テキストに再現することは出来なかったようである：

OBGT, Tablet VI

121) in-na-ni-in-gar	<i>ú-ša-aš-ki-iš-šum</i>
122) in-na-ni-gar	(<i>blank</i>)
123) in-na-ni-gar	(<i>blank</i>)
139) mu-na-ni-in-gar	<i>ú-ša-aš-ki-iš-šum</i>
140) 「mu」na-ni-gar	(<i>blank</i>)
141) 「mu-na」ni-gar	(<i>blank</i>)

OBGT, Tablet X

31) in-di-ni-ib-gub	<i>uš-zi-iz-zu</i>
37) mu-di-ni-ib-gub	<i>uš-zi-iz-zu</i>
32) in-na-an-gub	<i>iz-zi-iz-zum</i>
38) mu-na-an-gub	<i>iz-zi-iz-zum</i>
33) in-na-ni-in-gub	<i>uš-zi-iz-zum</i>
39) mu-na-ni-in-gub	<i>uš-zi-iz-zum</i>

(この他に Tablet, VI 118—120/136—138, *ibid.* 112—114/130—132, Tablet, X 58/60, 59/61 など参照。)つまり、Jacobsen のように Ventive の視点から Verbal prefix を分別すれば、Prefix i- はむしろ /b/ 要素の中に入れられなければならないことは明白であるが、上掲の諸例ではバビロニア人は mu- と i- との区別を行っていないのである。従って Jacobsen は、この i- を Aorist aspect を表わす Prefix と看做したのであるが、このような結論は文法テキストの分析から、必然的には出て来

ないし、前出の NBGT, II 86)–89) の見解とも一致しないように思えるので、再考の余地は充分にあると考える。

I — (iv) 第四の疑問点は、古典期のシュメール語の諸文材に於いて、全く在証されない Prefix 形を、そのまま正当なシュメール語の Prefix と看做している点にある。少くとも im-mu- (/àm-mu-) は問題で、措定される古形 i-mu- の可能性は考え難い。実資料では、mu- と i- (/e-) は対立的に用いられていて¹⁰⁾、その合成の可能性を想定出来ないからである。

I — (v) 以上の疑点の他に、もっとも深刻な問題は、Jacobsen 教授の説く、Speaker's ken/non-ken の理論の妥当性が古典期のシュメール語の実資料に於いて裏付けられないことであり¹¹⁾、バビロニア人が Ventive によってシュメール語のいかなる機能を訳出しようと試みたかは今一度検討して見る必要がある。

II

さて、叙上の如き The speaker's ken/non-ken theory から出発して、Jacobsen は更に、それら Prefix に含まれる母音要素に対し、次の如き機能を賦与している (Introduction, p. 24*)。

Movement	Movement+Arrest	(Ar)rest		
-m-			toward/through/from	here/now
	-m-mu-	mu-	in(to)/on(to) the center of	here/now
	-m-ma-	ma-	in(to) the interior of	here/now
	-m-mi-	mi-	on(to) the periphery of	here/now
-b(ta)			toward/through/from	there/then
		ba-	in(to) the interior of	there/then
		bi-	on(to) the periphery of	there/then

上表に於いて明らかな如く、Jacobsen の見解は、 $-m-mu- : mu-$ 、 $-m-ma- : ma-$ 、 $-m-mi- : mi-$ の対比に於いて、 $-mu- : mu-$ 、 $-ma- : ma-$ 、 $-mi- : mi-$ の各要素がそれぞれ機能的に相等しい同一の形態素であり、 $ma-$ 、 $mi-$ はまたそれぞれ $mu-$ とは別個な、全く自立的な形態素であるという前提のもとに立論されている。しかしながら、Jacobsen 教授のこの両前提は言語学的に認め難い。その理由を下に示して見る。

II — (i) $-ma- : ma-$.

$e-ma-$ 或いは $im-ma-$ に含まれる $-ma-$ が、 $*-ba-$ の推移形と考えられることに就いては、すでに叙べるところがあったが、 $ma-$ の原形としては、次の二つの場合が推定される。

- 1) $ma- < *mu-a-$ 或いは $*mu- , -a-$ (《私に》)
- 2) $ma- < *mu-ra-$ (assimilation により) (《汝に》)

先ず、機能的に見て、1) に挙げた $ma-$ は常に《私に》という Context に於いてあらわれ、2) の場合の $ma-$ は常に $ma-ra-$ として《汝に》という Context で用いられている。従って、既出の諸例に徴しても明らかな如く、三人称の表現に多く用いられる $im-ma-$ の $-ma-$ とは全く別個の形態素であることは疑問の余地がない。

形態的に考察して見ても、 $-ma-$ は $*-ba-$ に還元され、 $ma-$ は上述の如く $mu-$ を含む形態素と考えられるから、両形態素が全く起源を異にすることが理解される。従って、Jacobsen 教授の $-ma- = ma-$ の前提は、シュメール語の実資料に於いての十分な検討をへていないように思われる。

II — (ii) $-mi- : mi-$.

Prefix $mi-$ は、Infix $-ni-$ が接続している以外、すなわち $mi-ni-$ の組合せ以外では決して在証されず、しかも初期王朝期の文材では $mu-ni-$ 形のみが知られ、 $mi-ni-$ 形は認められない事実により、従来 $mu-ni- > mi-ni-$ の母音同化による推移が推定されていることは、「言語研究」第四十六号(東京1964)所収の拙稿《Babylonian Grammatical Texts について》、p. 2 に於いて触れた通りである。しかるに $im-mi-$ に含まれる $-mi-$ は、わざわざ用例を指摘するまでもなく¹²⁾、 $-ni-$ を伴わずに使用されるのが普通で、両形態素が起源を異にすることが推定される。つまり、 $mi-$ は $mu-$ の単なる Allomorph に過ぎないと考えられるが、 $-mi-$ はすでに述べた如く、推定形 $*-bi-$ に溯ると推定されるので、両者を同一形態素と看做すことは疑問としな

ければならないであろう。

< 結 び >

T. Jacobsen 教授の理論は、従来のシュメール学者が積み重ねて来た努力から離れて、独自に、主として¹³⁾シカゴ文法テキストの分析とその解釈にのみ依拠して展開されているが、多くの点で疑問に満ちていることを指摘して見た。ただ筆者は、教授の The speaker's ken/non-ken の理論、或いはバビロニア人の Ventive/Non-ventive 使い分けの意図を、mu-, i- の範ちゅうと ba-¹⁴⁾, bí- の範ちゅうの対立として理解すべきではないかと考えている。稿を改めて論じて見たい¹⁵⁾。(1964年11月25日)

(筆者は神戸外国語大学講師)

註

- 1) シカゴ, Oriental Institute 所蔵の文法テキスト。出土地未詳。Materialien zum Sumerischen Lexikon, IV, Roma [1956] の Old Babylonian Grammatical Text vi-x として集録されている。但し、楔形文字手写テキストは載せていない。
- 2) 子音で終る場合は -am, 母音で終る場合には -nim が接辞されるが、2人称女性単数では -im があらわれる。
- 3) B. Landsberger, *Der Ventiv des Akkadischen*, ZA 35, p. 113—123; W. von Soden, *Grundriss der Akkadischen Grammatik* (=Analecta Orientalia, 33), Roma [1952], § 82; J. Aro, *Studien zur mittelbabylonischen Grammatik* (=Studia Orientalia xx), Helsinki [1955], p. 87 etc.; I. J. Gelb, *Old Akkadian writing and grammar*, Chicago, [1952 & 1961], p. 169, p. 130—132; Л. А. Липин, *Аккадский язык*, Москва [1964] p. 100 など。W. von Soden は Ventive の用例として, *illik* “er ging” に対する *illikam* “er kam” を挙げて説明している (op. cit. p. 107)。
- 4) p. 6*, p. 7*, p. 15*, p. 24*, p. 26* etc. /b/ 要素は一般に „there/then” を意味すると解される。
- 5) アッカド語欄の訳語及び説明句は、次の訳語或いは説明句があらわれるまで有効である。従って、90) 行の説明は 101) 行まで係る。a-na-ku, at-ta, šu-u はそれぞれ、一、二、三人称、単数の自立代名詞。AN-TA, MÚRU-TA は、それぞれ、《Prefix》、《Infix》と訳されている。malitu は „full (form)”, riqtu は „void (form)” を意味する文法術語。
- 6) (šá) e-li-ti はシュメール語の AN-TA のアッカド語訳、《Prefix》。ù 及び u は接続詞《そして》。i-a-ti 《私を》。

- 7) e. g. A. Falkenstein, *Grammatik der Sprache Gudeas von Lagaš* I (=Analecta Orientalia, 28), Roma [1949] p. 46 etc., *Das Sumerische*, Leiden [1959] p. 48 etc., E. Sollberger, *Le système verbal dans les Inscriptions <<Royales>> Présargoniques de Lagaš*, Genève [1952] p. 68, etc. など参照。
- 8) この例は, Jacobsen の Speaker's ken/non-ken の立場からも容易に説明が与えられるが, 挙例, 2), 3) の場合には満足な説明が得られない。
- 9) Prefix mu- のこのような訳し分けは, Jacobsen の考えたように例外ではなく, むしろ mu- の用法を忠実に伝えていると考えられる。すなわち敬語法としての Relative な面と Absolute な面を表わしていると思われるが, 詳しくは別の機会に譲りたい。
- 10) 拙稿「シュメール語の Verbal prefix mu-, e- の敬語法による解明」(本誌 No. 1, 1957) 中の用例及び, RTC, No. 19 に於ける šu mu-na-kíd, mu-da-gin-na-a, mu-na-sum/šu-e-na-kíd, e-da-gin, e-na-sum の使い分けなど参照。
- 11) I—(i) に挙げた例など参照。
- 12) I—(i) の用例 3) など参照。
- 13) Ventive による解釈は Chicago 文法テキストのみではなく, OBG T, I a, Col. II, 11'), 12'); OBG T, II, Rev. 6'), 7'), 11'), 15'); OBG T, III, A II, 90) etc.; OBG T, V, 5), 6) に於いても確認することが出来るし, Babylonian 系の Bilingual texts に於いても, Ventive による同趣の対訳を認めることが出来る:
e. g. CT., XVI, Tablet 3, pl. 1, Col. I
- 13) e-ne-ne-ne šú-nu lim-nu-tum ħul-a-meš
14) kuš-mu ana zu-um-ri-ia a-a it-ħu-ni nam-ma-te-gá-e-ne
15) igi-mu ana pa-ni-ia a-a ú-lam-mi-nu-ni nam-ma-ħul-e-ne
16) egir-mu ana ár-ki-ia a-a il-li-ku-ni nam-DU-DU-ne
17) é-mu ana biti-ia [a-a i-ru-bu-ni] nam-ma-tu-tu-ne
18) ùr-mu ana ú-ri-ia a-a []-ni nam-bal-bal-e-ne
19) é-ki-dúr-a-mu a-na bit-šub-ti[-ia a-a i-ru-ub-ni] nam-ma-tu-tu-ne
20) zi-an-na ħé-pàd [zi]-ki-a ħé-pàd
- ibid. pl. 6
- 214) kuš-mu nam-ma-te-gá-e-ne
215) ana zumri-ia a-a it-ħu-ni
216) igi-mu-šè nam-ma-ħul-e-ne etc.
- ただし, Chicago GT. 同様, mu- は Non-ventive として扱われている例が多い:
e. g. ibid. pl. 2

Chicago Grammatical Texts に於ける Ventive について

- 38) lú-ulù^{lu}-pab-ḫal-la bar-šè mu-un-na-te-eš
 39) *ana amēli mut-tal-li-ki ina a-ḫa-ti iṭ-ḫu-u*
 40) á-sìg-tur₇-ra kuš-na mi-ni-in-gar-re-eš
 41) *a-šak-ku mar-ša ina zumri-šú iš-ku-un*
 42) ḫul-nam-erím-ma kuš-na gál-la-na
 43) *ma-mit li-mut-tum ina zumri-šú ib-šù-ú*
 44) ù-mu-un-ḫul-a kuš-na mi-ni-in-gar-re-eš ù-mu-un-na-a lim-nu ina zumri-šú iš-ku-un

第一及び第二の用例で nam-ma- (<*na-im-ma-) は Ventive -ni (<*nim) によって訳出されているが、アッシリア系の楔形文字で記されているテキストに於いては、この Ventive による解釈は認められないようで、注目に値する：

e. g. CT., XVI, Tablet 5, pl. 16, Col. VI

- 1) [] udug-ḫul mu-un-da-ru-uš
 2) [] ú-tuk-ku lim-nu i-ta-ru-uš
 3) [] -ná-a im-ma-an-uš
 4) [] šī la-na-bu-u ir-te-di-šú
 5) [] -su-bi nu-è-dè im-ma-an-uš
 6) šá ina zu-mur la šu-bu-u ir-te-di-šú
 7) šu-ni in-ra šu-a-ni-šè im-me-in-gar
 8) ḫa-as-su im-ḫaš-ma ana ḫa-ti-šú iš-kun
 9) gír-ni in-ra gír-a-ni-šè im-me-in-gar
 10) še-ep-šú im-ḫaš-ma ana še-pi-šú iš-kun
 11) sag-gá-ni in-ra sag-gá-a-ni-šè im-me-in-gar
 12) ḫaḫ-ḫa-su im-ḫaš-ma ana ḫaḫ-ḫa-di-šú iš-kun

このアッシリア系テキストに就いての解釈は別の機会に触れることにする。

- 14) ba- に含まれる -a- に就いては、「オリエント」第七巻第3号（東京1964）所収予定の拙稿《シュメール語の Verbal prefix ba- について、—Middle voice より Passive voice へ—》参照。
 15) 続稿《シュメール語の Verbal prefix bi- について》(掲載誌未定)参照。